

通時的意味におけるエンプソンの ‘argufying’

須永 隆広

1. はじめに

‘argufying’ という語はあまり聞き覚えのない語である。エンプソン自身、初めて ‘argufying’ を用いたのは、二作目の *Some Versions of Pastoral* (1935) であり、それも、‘Milton and Bentley’ の章の中で、たった一度しか用いていない。また、*The Structure of Complex Words* (1951) や *Milton's God* (1961) でも ‘argufying’ を用いているが、やはりわずかにすぎない。そのため、この語を論文のタイトルにした理由は定かではないが、逆にいえば、詩や批評を含めたエンプソンの作品には、‘argufying’ という概念で解釈できるものがあると考えられる。そこで、1963 年に執筆した論文、‘Argufying in Poetry’ を手掛かりに、エンプソンが用いた ‘argufying’ の意味を、具体例を示しながら論考する。

2. エンプソンの ‘argufying’ とは何か

エンプソンは、‘Argufying in Poetry’ の冒頭で “I must have had strong feelings about this topic for a considerable time, without recognising them.” (*Argufying* 167) と自分自身に言い聞かせるように、この語に着目している。そこで、‘argufying’ について辞書にある意味とエンプソンが用いている意味を比較考察する。

辞書にある意味については、*OED* に ‘argufy’ が掲載されている。‘argufying’ は、‘argufy’ の動名詞なので、同義語として ‘argufying’ の意味を述べると、“A colloquial and dialectal equivalent of argue, usually with the idea of pertinacious or petty argument.” と記されているように、あまり良い意味では用いられない。このような意味に対して、エンプソンは、‘Argufying in Poetry’ の中で、‘argufying’ について、次のように述べている。

‘Argufying’ is perhaps a tiresomely playful word, but it makes my thesis more moderate; I do not deny that thoroughly conscientious uses of logic

could become a distraction from poetry. Argufying is the kind of arguing we do in ordinary life, usually to get our own way; I do not mean nagging by it, but just a not specially dignified sort of arguing. This has always been one of the things people enjoy in poems; and it can be found in every period of English literature; (167)

エンブソンは、‘argufying’を基本的には辞書にある‘argufy’の意味と同様にとらえている。また、彼は‘argufying’に更なる意味を含ませて、イギリス文学のあらゆる時代に‘argufying’を発見できるとさえ述べている。エンブソンは、表面的には、‘argufying’を‘arguing’の一種であるものの、ひどくふざけた語として取り上げているが、実際には、むしろ、詩を読む際に必ずと言ってよいほど見出せる議論として、‘argufying’という概念を非常に重視していると解釈すべきである。

3. 通時的意味における‘argufying’

(1) 世代間における‘argufying’

エンブソンは、*Seven Types of Ambiguity* (1930) の執筆前に詩を創作していた。特に、1928年には主要作ともいべき詩を生み出している。もっとも、創作した詩は多くなく、解釈も非常に難解であるが、それでもエンブソンは他の詩人や批評家から、批評家以上に詩人として認められている事実もある¹。デボラ・バウマン (Deborah Bowman) も ‘Argufying and the Generation Gap’ という論文の中で、エンブソンの詩や批評を取り上げている。そこで、彼が1928年に創作した詩、‘To an Old Lady’に注目する。この詩は、*King Lear* の ‘Ripeness is all’ という有名な台詞から始まるが、藤田真治は、この部分が ‘The readiness is all’ の意味にもとれると述べており、「*Hamlet* の ‘The readiness is all’ は「来るべき死に備えることこそ肝要である」という意味だが、単に死に備えることを意味するのではなく、成熟の意が強く働いていることも忘れてはならない。」(藤田 63) と解説している。この意味において、筆者は、エンブソンの母親が老いるということは、同時にエンブソンが成長するということを意味し、藤田が述べるように、成熟の意味も含蓄していると解釈する。さらに、‘Ripeness is all’ の後に、セミコロンを挟んで、‘her in her cooling planet’ という台詞が置かれているが、藤田は「‘cooling planet’ は

彼女の肉体を示すとともに、人間の運命を左右する運星の意味を読むべきであろう。」(藤田 63) と述べている。次の行では、'Revere' から始まり、'do not presume to think her wasted' と続いているが、筆者は、語り手であるエンプソンが母親に対して畏敬の念を表すとともに、同情の念も含んでいると解釈する。この点について、藤田は、「老女を敬えという言葉の裏には、老人に対する軽視の気持ち、肉体的脆弱さへの蔑視を否定することはできないものと認めた上でのものでなければならない。」(藤田 63) と解釈しているように、蔑視という意味でとらえているが、筆者は、上述の同情とそれほど意味の相違はないと考える。また、バウマンは、'Ripeness is all' が、悲しみと慰めの関係を明らかにする母に対する息子の言葉であり、「異質でありながら同質である」ということを表していると述べ、次のように、この詩を書く際のエンプソンの感情に触れている。

In considering the considerable life of Mrs Empson, then, the poem also thinks about the sorts of future life which Empson was at that time contemplating for himself. (Bowman 27)

このように、エンプソンが母親の人生から自分の人生を考えるのは、まさに、彼女が親であって自分とは異質であるものの、親子という点では同質であるためである。さらに、バウマンは次のような指摘もしている。

In 'To an Old Lady' the speaker declares that he will keep his distance, and in this, Empson shows the same fine linguistic tact with which he reports the quarrel with his mother. (28)

これは、この詩の最終連にある 'Strange that she too should be inaccessible' への言及であると思われるが、この背景には、実際、エンプソンが詩人を目指そうとしたことで母親と口論になった事実を反映していると思われる。バウマンは、エンプソンの母親に対する見方を次のように述べている。

... the young man envies his mother her stable point of view, but also salutes her different ways of seeing, hearing, and speaking which have played a part, however subtly, in forming his own. (29)

上記のように、エンブソンは、母親の安定した考え方を羨ましく思っていると同時に、彼自身とは違った母親のやり方に敬意を払っている。しかしながら、たとえどれほどわずかでも、母親のやり方は、彼の見方、聴き方あるいは話し方を形成する際の一因となっている。したがって、母親に従うことを否定したくても、自分の成長に母親の存在は不可欠であるということを認めることによって、エンブソン自身の中に葛藤ともいえるべき対立が生じている。つまり、この対立的な構造から生じる母親との口論が‘argufying’である。

さらに、バウマンは、この詩が母親への反抗だけでなく、エンブソンが詩を創作していた当時、彼が意識していた最近のフランスの詩人や1590年から1640年のイギリスの詩人に反抗しようとあがいていたように²、先人の詩人に対する感情にまで言及している。実際、エンブソンは、‘Argufying in Poetry’の中で、ジョン・ダン (John Donne) について次のように述べている。

As a writer of verse myself, I grew up in the height of the vogue for the seventeenth-century poet Donne, and considered that I was imitating him more directly than the others were. We all said we admired him because he was so metaphysical, but I can see now that I really liked him because he argued, whereas the others felt that this side of him needed handling tactfully, because it did not fit the Symbolist theory. (*Argufying* 167)

エンブソンは、詩人として、形而上学派詩人のダンが詩の中で議論していることを賞賛しており、他の詩人がダンのやり方を模倣する以上に、より直接的にダンをも倣したとして、その影響を肯定的に述べているが、上述した母親との関係と同様に、先人の詩人に対する反抗も読み取る必要がある。なぜなら、エンブソンは、ダンと同様に先人詩人であるエドモンド・スペンサー (Edmund Spenser) に対して次のように言及しているからである。

... however rightly we may revere Spenser, he seems about the last man a modern poet would study to learn technique, ... We need to recognise that there is a considerable resistance to Spenser, which I partly feel myself; or at any rate a resistance to the process of soaking oneself in Spenser at great length, which is the only effective way to read him. He

is a separate world, (244)

エンプソンは、スペンサーという詩人について、どれだけ尊敬しようとも、彼を含めた現代の詩人は、スペンサーの詩の技術を学ぼうとは思わないとして、スペンサーに対する反抗がかなりあることを認めている。しかしながら、同時に、エンプソンは、スペンサーに没頭しなければ彼の詩を読む唯一の効果的な方法は得られないことも理解しているため、彼は、自身の中に「尊敬と反抗」という葛藤を抱いている。つまり、エンプソンが直接影響を受けたダンであれ、スペンサーであれ、あるいは他の形而上学派詩人であっても、偉大な詩人に影響を受けることは、彼を含めた現代詩人にとって、先人の詩人達に支配されてしまうことを意味する。したがって、エンプソンを含む現代詩人は、先人の詩人に反抗しなければならないという対立的な意識を持っているのである。また、彼らからみれば、スペンサーは 500 年もの昔の詩人であるため、明らかに、現代詩人とは別世界の詩人である。このような関係は、次のバウマンの見解にもあるが、上述のように「尊敬と反抗」を表した親子の関係と類似する。

Spenser is revered and resisted because he, like Mrs Empson, 'is a separate world'; Empson's writing about his literary predecessor draws on his feelings for, and the vocabulary he used to describe, his familial elder. The divide between the young man and all his parents, literary and familial, is a point of conflict and a cause for nostalgia; (Bowman 29)

上述におけるバウマンの見解のように、エンプソンにとって、文学上、あるいは家族上の両親とみなせる人々は、共通して対立的な対象でありながら、ノストラジアの原因でもある。つまり、エンプソンは、彼らを見本としており、いつかは乗り越えたいと思っている子の立場にある。したがって、エンプソンと母親、あるいは先人詩人との関係において、彼が感じる葛藤に世代間ギャップにおける 'argufying' が存在するのである。

(2) 詩のスタイルにおける 'argufying'

'argufying' は、詩のスタイルにおいても、上述した世代間ギャップによる 'argufying' と同様に対立的な構造を見出すことができる。ここでは、象徴主

義の詩における主な規則に対するエンプソンの見解を論考する。

まず、エンプソンが、‘Argufying in Poetry’の中で、象徴主義の詩をどのように感じているか、その見解を以下に引用する。

Good poems have been written which appear to carry out the Symbolist rules; the best poems written in English during this century are Symbolist, and they are very good. But it has gone on long enough; poets now are finding the rules an obstacle, all the more because literary theorists commonly talk as if no other kind of poetry is possible but Symbolist poetry. (*Argufying* 167)

上述のように、エンプソンは、20 世紀に書かれた最も優れた詩は象徴主義の詩であると評価している一方で、彼は、象徴主義の詩の規則に対する不満を次のように述べている³。

The main rule is that a poet must never say what he wants to say directly; that would be what is called ‘intellectualising’ it; (167)

このようなエンプソンの ‘intellectualising’ は、象徴主義の主な規則に対する反論である。後藤明生によれば、象徴主義の詩とは、「言葉をいわば音楽の状態に高揚させるために、散文の要素を完全に抹殺しようとする試みである。(中略) この種の詩の傾向を見て明らかなように、詩のメタファーは次第に伝達不可能な方向に進んでいく。」(後藤 48) と述べているが、エンプソンは、詩人はイメージと呼ばれるメタファーによって、伝えたいことを暗にほめかさなければならないとしてイメージの重要性を強調している⁴。彼は、‘Argufying in Poetry’の中で、ジョン・キーツ (John Keats) の ‘To Autumn’ の一篇を取り上げて、イメージの重要性を次のように述べている。

Muscular imagery is the most important kind for reading poetry; at least, it is for the sort of poetry I like. This does not mean being frightfully athletic; when Keats says of the Goddess of Autumn:

sometimes like a gleaner thou dost keep⁵

Steady thy laden head across a brook,

We feel in our muscles the effort of balancing, that is, the effort of keeping still, so we realise how precarious the autumn is, in its immense calm, though the deluded bees think it will last for ever; how wisely the swallows in the last line are gathering to emigrate. (*Argufying* 169-170)

上述のように、エンプソンは、自身が詩を読む際に力強いイメージを重視していると述べ、キーツの詩の擬人化した秋に注目している。つまり、秋は女神であり、彼女が頭に収穫（あるいは理性）という荷物をしっかり保ちながら、小川を渡るようなイメージは、常に安定さを欠く頭上の荷物と、その荷物のバランスを保つという意味の対比である。また、秋という季節の不安定さも、秋の静けさ（安定）との対比である。このように、エンプソンは、対立的な概念を 'balance' や 'precarious' 等の語から見出すが、彼は、*Seven Types of Ambiguity* の結語で "... if there is contradiction, it must imply tension; the more prominent the contradiction, the greater the tension; ..." (*Seven Types of Ambiguity* 235) と述べているように、この詩における対比は、'tension' という語に置き換えることができる。したがって、力強いイメージとは、いわゆる 'tension' の大きさを示しているのである。しかしながら、彼は "... whereas a visual image is hardly ever essential, I think." (*Argufying* 170) とも述べており、動作を伝える視覚的イメージが最も重要であるとは考えてはいない。むしろ、'therefore' のような論理的接続語をより重視しているようである。その見解を以下に引用する。

Some sort of parallel may be found in the way logical connectives (the statement of logical form in addition to logical content) are usually unnecessary and often misleading, because too simple. Omitting an adjective one would need 'therefore' stressing the adjective 'although'; both logical connections are implied if the sentences are just put one after another. (*Seven Types of Ambiguity* 234)

上記の見解について例を挙げると、「それは難しい質問である。彼はそれを解く」の「難しい」を省けば、「それは問題である。それゆえに、彼はそ

れを解く」となり、「それゆえに」という接続語が必要になる。また、「難しい」を強調すると「それは難しい問題である。けれども、彼はそれを解く」となり、「けれども」という接続語が必要になる⁶。つまり、形容詞の省略あるいは強調によって接続語が必要になると、その接続語が何らかの概念を含蓄していくので、その分、いくつかの解釈が可能になる。さらに、エンプソンは、‘therefore’について、次のように述べている。

Saying ‘therefore’ is like giving the reader a bang on the nose; and though it may be said that ‘intellectualised’ poetry feels stale and unreal, a bang on the nose does not feel stale and unreal; it is just as fresh the twentieth time as it was the first; that is, if you are granted enough leisure for recovery. (*Argufying* 170)

上述のような “Saying ‘therefore’ is like giving the reader a bang on the nose;” という発言は非常にユニークであるが、ひとつには、上述の接続語の例や ‘fresh’ という語に着目することで、多義的に解釈が可能であることを示唆しているのではないだろうか。つまり、エンプソンは、多義的に解釈できる詩を美しい詩とみなしているが、論理的接続語を用いることによって、解釈における ‘freshness’ をもたらすと考えられる。また、もうひとつには、象徴主義詩の主な規則への対比も考えられる。たとえば、エンプソンは、W.B. イェイツ (William Butler Yeats) の ‘Byzantium’ は壮大な力強いイメージで満たされているとして非常に高く評価しているが、他方で、トマス・ワイアット (Thomas Wyatt) の詩⁷については、あまり過剰に褒めたくはないとしながらも、‘wherefore’ が用いられていることに注目して、次のように述べている。

I do not want to over-praise the poem. But it is plain that ‘Wherefore’ comes out not merely with boyish glee but with lyrical grace; (170)

上述のように、エンプソンは、ワイアットがこの詩の中に ‘wherefore’ を用いたことで、少年らしい歓喜のみの詩ではなく、叙情的な魅力を持った詩であるとして評価している。これは、明らかに ‘wherefore’ を用いたことによる効果の表れである。さらに、象徴主義との対比において、エンプソンは

次のような見解を示している。

We are now ready to recognise the main fact about Symbolist poetry; it is the poetry of the hamstrung, the people who have cut the strings in their legs. . . . The truth is, it is high time they got the use of their legs back. . . . the whole movement turns upon it, like the thigh-joint of a ballet dancer. (170)

エンプソンは、間接的で、名詞を並べたような象徴主義の詩を、まるで脚の腱を切られたような人々の詩であるかのように喩えている一方で、接続語を用いた詩を、バレエダンサーの腿の関節のような機能を有した詩であるかのように喩えている。そして、彼は、“The truth is, it is high time they got the use of their legs back.” (170) と述べているように、象徴主義の主な規則にしたがっている詩からの脱却を促している。このような、エンプソンが対比させているふたつの詩の関係も、様式的には異質であるものの、詩として同質であるという点で、'argufying' の定義に即したものである。

さらに、接続語は、時間的な概念においても大きな役割を担っている。たとえば、ジェイムズ・スミス (James Smith) は、*Seven Types of Ambiguity* の分析手法に対して、*Criterion* (10 巻 41 号) に書評を投稿しており、主にエンプソンの分析方法を批判しているが、注目すべき点は、本書を読み進めていくと、次第に劇からの引用が多くなっているという指摘である。この指摘は、劇詩に時間的な概念を含む接続語が、比較的、多く含まれていることを裏付けるものと考えられる。つまり、エンプソンは、時間的な概念も力強いイメージを与える要素のひとつであると考えているのである⁸。したがって、論理的接続語は、意味を含蓄するだけでなく、時間的な概念も示唆する点で、重要な役割を担っている。

また、エンプソンは、*Seven Types of Ambiguity* (Third Edition) の 'Preface' において、第1の型 (シェイクスピアの Sonnet 73) と、第7の型 (ジョージ・ハーバートの 'The Sacrifice') に対し、自身の解釈を擁護する必要に迫られたと述べている。とりわけ、後者については、具体的に、ロズモンド・テューヴ (Rosemond Tuve) の反論を取り上げて、彼女の反論に答えている。以下に、'argufying' の的になった 'The Sacrifice' の一篇を取り上げる。

Man stole the fruit, but I must climb the tree,
The tree of life, to all but only me. (*Seven Types of Ambiguity* 232)

この詩行は、エンプソンが第7の型で取り上げた部分であり、彼は、次のように解釈している。

He [Christ] climbs the tree to repay what was stolen, as if he was putting the apple back; but the phrase in itself implies rather that he is doing the stealing, (232)

この解釈に対して、チューヴは、‘On Herbert’s “The Sacrifice”’ (*The Kenyon Review* 1950 年 12 月) と題した論文の中で、次のように反論している⁹。

The conventions of the poem drive from the liturgical offices of Holy Week, especially the Improperia or Reproaches of Good Friday.
(*The Strengths of Shakespeare’s Shrew* 119)

チューヴによれば、‘The Sacrifice’ の伝統的に決まった型は、聖週の礼拝儀式、特に、金曜日の十字架礼拝時の歌の一連の交唱に由来するとして、上述のエンプソンの対立的な解釈に反論したのである。さらに、彼女は、「登る」という語に焦点を当てて次のように述べている。

[Tuve’s] Her fuller version [*A Reading of George Herbert*] still says ‘the phrase about climbing the tree (ascending the Cross) is the veriest commonplace’, and ‘Herbert uses the time-honoured “climb”, for the ascent of the Cross’, (120)

上述のように、チューヴは、ハーバートが用いた ‘climb’ が伝統的に「登る」として用いられており、この語を用いた同様の表現はいくらでもあると述べている。しかしながら、この意見に対して、エンプソンは次のように反論している。

I had not felt myself to be pulling any punches, but it looks as though a

rather more discourteous approach may be the only way to make contact with a mind so embedded in complacency. (120)

上述のように、エンプソンは、チューヴのような自己満足にすっかり浸っている精神の持ち主と付き合う唯一の方法は、より失礼な答え方をすることであると述べた上で、雅歌にある一節、'I will go up to the palm-tree' に注目して、この語は本来 'climbing the palm-tree' ではないと解釈している。さらに、エンプソンは、チューヴが 'I will go up to the palm-tree' を伝統的に読み間違いしているにもかかわらず、その点には全く言及していないと指摘している。つまり、エンプソンは 'go up to' を「近づく」という意味で解釈しているが、彼は、チューヴを含め、聖書を読む殆どの人が 'go up to' を 'climb' 「登る」という意味で解釈していることを指摘しており、「伝統的に誤読しているのではないか」と主張しているのである。さらに、エンプソンは、チューヴが 'it's a convention'. という一言で片づけてしまう事に対して次のように述べている。

She [Tuve] feels, as she is so fond of saying, 'it's a convention'. I do not call this 'knowledge' at all, and it is clearly not a help to criticism. (120)

つまり、エンプソンは、チューヴの用いる 'it's a convention'. を、批評における知識とは決して言えるものではないと主張しているのである。

エンプソンとチューヴの 'The Sacrifice' の解釈をめぐる議論は、*Seven Types of Ambiguity* (First Edition) 出版後、約 20 年を経て出された Second Edition (1949) から、Third Edition (1953) が出版される間まで続き、決着こそもたらさなかったが、1995 年 1 月 10 日付の Thomas P. Roche, Jr. の論文 'letter to Haffenden' の中で、チューヴはエンプソンに対して「私達は仲間である」と述べていたことが記されている。

以上より、エンプソンが 'Argufying in Poetry' の冒頭で言及したように、'argufying' には、(イギリス) 文学において、批評家同士で常に見られる容赦ない議論である一方、お互いに尊敬しているという意味が含まれている。すなわち、彼らの間には「異質でありながらも同質である」という概念の 'argufying' が存在しているのである。さらに、この議論は、単にチューヴとエンプソンという個人的な 'argufying' ではなく、歴史批評と分析批評という

通時的な意味の ‘argufying’ であるといえる。

4. まとめ——‘argufying’ の意義——

本稿では、エンプソンの ‘argufying’ を、実例を取り上げながら論考した。エンプソンの ‘argufying’ は通時的な意味と共時的な意味として区別することができるが、本稿においては、通時的な意味の ‘argufying’ に焦点を当てた。具体的には、世代間により生じる ‘argufying’ として、エンプソンと彼の母親という親子関係や、エンプソンとダン、あるいはスペンサーという先人詩人と現代詩人の対立を示した。それから、詩及び批評に関する ‘argufying’ では、象徴主義の詩の主な規則と、それに対するエンプソンの主張、つまり、詩のスタイルにおける ‘argufying’ として、名詞を並べた詩に対し、‘therefore’ 等の論理的接続語を用いた詩を取り上げた。また、批評については、ハーバートの ‘The Sacrifice’ の解釈をめぐるチューヴとエンプソンの議論を取り上げたが、これは、歴史批評と分析批評という対立を示している。これらの例は、本質的に「異質でありながら同質である」という共通した ‘argufying’ の概念が含まれている。すなわち、エンプソンは ‘argufying’ という概念を用いて、ある命題から次の命題へ変化をもたらすことを目的とした批評におけるアンチテーゼ的な役割を担い、批評理論全体の発展に寄与したのである。

※本稿は、2012 年 9 月 1 日に開催された日本英語文化学会第 15 回全国大会（於、駒澤大学）における口頭発表の一部に加筆・訂正を加えたものである。

註

¹ エンプソンは、*Seven Types of Ambiguity* を出版した前年に、6 本の詩（‘To an Old Lady’、‘Letter’、‘Arachne’、‘Villanelle’、‘Legal Fiction’、‘Part of Mandevil’s Travels’）を *Cambridge poetry 1929* に投稿した。これらは、1928 年に発表した詩だが、上記の詩の殆どが、詩人エンプソンの代表的な作品として高い評価を受けている。

² フランスの象徴主義派詩人とイギリスの形而上学派詩人を指している。

³ エンプソンは、‘Argufying in Poetry’ の中で、“We are now ready to recognise the main fact about Symbolist poetry; it is the poetry of the hamstrung, the people who have cut the strings in their legs. . . . The truth is, it is high time they got the use of their legs back.” (*Argufying* 170) と述べているように、脚の腱のイメージで説明しながら、象徴主義の詩からの脱却を提唱している。

⁴ 矢本貞幹は、「エンプソンと詩の意味」という論文の中で、エンプソンの分析方法の限界について次のように述べている。「エンプソンの説明によると、20 世紀のように動揺の激しい変転の時代には、詩人は自己の内部の世界と外部の世界との間に衝突を感じ、矛盾に苦しむ。その苦悩する複雑な経験を詩の言葉に移す時には、言葉と意味との間が複雑であったり、詩人自身の混沌とした心的状態のために意味が錯雑していたりする。そういう意味の錯綜した難解な詩に対しては、詩の意味分析がなかなか難しい。エンプソンも 20 世紀の難しい詩については、その中から 2、3 の単語を抜き出して究明したり、一部分だけの分析にとどめたりしている。16、17 世紀の詩に対するエンプソンの方法の切れ味は、20 世紀の詩に対しては見られない。」このような矢本の見解は、現代詩だけでなく、部分的に象徴主義の詩にも当てはまるのではないだろうか。

⁵ 'To Autumn' は、原文では 'and sometimes like a gleaner thou dost keep' のように、and から始まっているが、本稿では、エンプソンが 'Argufying in Poetry' の中で記した通りに引用した。

⁶ 岩崎の訳注をもとにして、具体例を敷衍した。

⁷ ワリアットの詩 'With Serving Still' を、エンプソンが 'Argufying in Poetry' に掲載した通りに引用する。

With serving still this have I won
For my good will to be undone
And for reward of all my pain
Disdainfulness I have again
And for redress of all my smart
Lo, thus unheard I do depart
Wherefore all ye that after shall
By fortune be as I am, thrall,
Example take what I have won
Thus for her sake to be undone.

なお、エンプソンは、この詩について、次に引用する C.S. ルイス (C.S. Lewis) の見解に同調している。"... how right C.S. Lewis was to say 'How unpleasant it must have been for a woman to have Wyatt in love with her.'" (*Argufying* 170)

⁸ *Seven Types of Ambiguity* の第 1 の型には、時間的概念における対立を明確に表したアーサー・ウェイリー (Arthur Waley) 翻訳の中国詩がある。この詩に対するエンプソンの見解は、人間の心には二つの時間が存在するとして 'swiftly' と 'stillness' に注目したものである。なお、以下に、本書に引用された中国詩 (英訳) を掲載する。

Swiftly the years, beyond recall.

Solemn the stillness of this spring morning.

⁹ テューヴの論文 'On Herbert's "The Sacrifice"' は、*A Reading of George Herbert* に収録されているが、本稿ではエンプソンの論文 'Last Words on George Herbert', *The Strengths of Shakespeare's Shrew* の引用をそのまま掲載した。

引証資料

- Bowman, Deborah “Argufying and the Generation Gap”, *Some Versions of Empson*, ed. Matthew Bevis. New York: Oxford University Press, 2007.
- Empson, William. *Seven Types of Ambiguity*. 1930; New York: New Directions, 1966.
- _____. “Argufying in Poetry”, *Argufying Essays on Literature and Culture*, ed. John Haffenden. Iowa city: University of Iowa Press, 1988.
- _____. “Last Words on George Herbert”, *The Strengths of Shakespeare’s Shrew*, ed. John Haffenden. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1996.
- Tuve, Rosemond. *A Reading of George Herbert*. Chicago: University of Chicago Press, 1952.
- 川崎寿彦『ニュー・クリティシズム概論』東京：研究社、1964 年。
- 藤田真治「William Empson の詩：覚え書き」『広島商大論集 商経編』広島商科大学、8 号、1966 年。
- 矢本貞幹「エンプソンの詩と意味」『英語青年』第 117 巻第 2 号、研究社、1971 年。
- 渡辺暢郎「ウィリアム・エンプスン研究序説」『人文論究』関西学院大学、13 巻 3 号、1962 年。

Synopsis

SUNAGA Takahiro

William Empson wrote the paper, ‘Argufying in Poetry’, in 1963. This is the first paper which he used ‘argufying’ as a title. In this paper, he confessed that he focused on this word, ‘argufying’ for a long time. In fact, he used it for the first time in ‘Milton and Bentley’ included in *Some Versions of Pastoral* (1935) which it is the second book written by Empson. Since I would like to study the meaning of ‘argufying’, which he used in his books, first, I will define ‘argufying’ which he used in ‘Argufying in Poetry’ and compare ‘argufying’ used by him with ‘argufying’ given in dictionary. Secondly, I will try to classify ‘argufying’ as two types, one is ‘argufying’ as diachronic meaning that includes generation gap like between parents and son or daughter and etc, another is ‘argufying’ as lateral meaning that does not consider time like synchronic way, while I describe some instances in his books or papers as well as other authors’ papers. Finally, I would like to try to interpret one of his ‘ambiguities’ in *Seven Types of Ambiguity* or itself [*Seven Types of Ambiguity*] as his ‘argufying’.